P・ドレシュ著

『イエメンにおける部族，政府，歴史』

Paul Dresch, *Tribes, Government, and History in Yemen*. Oxford: Clarendon Press, 1989; Clarendon Paperbacks, 1993, xxix+440pp.

大坪玲子

I

アラビア半島南部に位置するイエメンでは，歴史的にそして現在でも部族が政治勢力として機能している。部族の存在は人類学以外の分野でも注目されてきたが，さまざまな要因からその調査研究が充分行なわれているとはいい難い(注1)。本書は上イエメン（イエメン北東部）の部族を包括的に扱った，最初の民族誌である。

著者ドレシュは，1977年から断続的に上イエメンのザイド(Zayd)派（シーア派の一派）部族民のフィールドワークを行なっている。著者は最初の調査の時に，上イエメンの部族のほとんどが属する二大部族連合のうちの一方の部族連合の有力者と知り合い，その首都ともいえる地方都市を調査の本拠地にできた。その後，上イエメン各地も精力的に調査し，多くの部族民から得た情報が，本書の基盤になっている。さらに，アラビア語の文献も多く引用しており，部族をめぐって議論は多岐に及ぶ。本書の特色は，民族誌的現在と過去とが交錯する構成をとっていることであるが，このことについては後で論じる。本書の章立ては以下のとおりである。

第1章　序章
第2章　名誉の言語
第3章　部族と集団行動
第4章　部族の平和内にある社会的身分
第5章　サイイドの歴史と書かれた歴史
第6章　カーシム朝からハミード・アッディーン朝の歴史(c. 1600-1950)
第7章　9月革命と内戦後の共和国
第8章　村の生活と生活手段
第9章　部族の自己定義の構造
第10章　現代社会における部族と出来事

II

本書および本稿で指す「イエメン」とは，歴史的にはイマーム(imām，ザイド派の最高宗教指導者)が「支配」した上イエメンを中心とし，後に革命（1962年）によってイエメン・アラブ共和国（北イエメン）となったところである。著者は，「本書で扱う部族民は北イエメン国境内にいる」（3ページ）とし，さらに上イエメンと下イエメン（イエメン南西部）とを区別した上で上イエメンを考察対象としている。部族民の分布する上イエメンはかなり明確な範囲を示すので，一応この前提は妥当なものと考えられる。

第1章では，まず本書の目的が示される。それは，「歴史と民族誌とを結びつけて，部族民が歴史上どのようなアイデンティティーを形成してきたか，そして現代社会にどう位置しているかということを示す」（1ページ）ことであり，著者の歴史への関心が明確に提示される。次に地理条件から1980年代半ばまでの経済変化まで，本書を読む上での予備知識を整理しながら後の章で述べる議論の伏線を張っている。部族民は主として農業を営んでおり，農業は部族民にとって「名誉ある」生業であるということは（13ページ），ここで明記しておく。

続く第2，3，4章は，人類学者が民族誌を書く上での常套手段である現在形で書かれている。第2章では部族民個人の名誉について論じられる。部族民は名誉を持つが，名誉とは自分および自分の保護下に入っている人や物を守ることであり，もし守るべきものが攻撃されたら，つまり名誉が傷つけられたら，復讐か賠償請求という形で名誉を回復しなければならない。名誉を表わす言葉としてシャラフ(sharaf)とアルド('arḍ)が示されるが，著者による

両者の区別は必ずしも明確ではなく，部族民が名誉をシャラフとアルドに分けて考えているかどうかは不明である。

第3章では前章の名誉の概念を部族に当てはめ，さらに部族の有力者であるシャイフ(shaykh)について説明される。ある部族の成員は，共通の名誉を保持するよう要求される。部族民を集団行動に駆り立てるのは，社会構造や権威ではなく，部族や下位集団であるセクションの名称に基づく名誉である。しかし実際の集団の形成は，ライフルの授受などの具体的な行為を伴って行なわれ，それを行なうのがシャイフの役割である。シャイフは，シャイフを輩出する家系から優秀な者が選出されるのだが，部族やセクションごとに必ず1人いるわけではない。シャイフの主な機能は調停にある。調停に優れたシャイフは，調停に成功し続けることで，部族や部族連合を越えてその影響力を及ぼすことさえ可能となる。現在見られる二大部族連合の結束力の差は，連合内のシャイフたちに認められた突出したひとりのシャイフ（大シャイフ）の力量によるものである。

部族領土にいるのは部族民だけではない。第4章で述べられる非部族民は，部族民の持つ名誉を持たず，部族民の保護下に入っており，大きく2つに分類できる。1つは部族民が「恥ずべき」と考える職業に従事する「弱い」(ḍa'īf)人々であり，もう1つは宗教的な知識を備えた人々である。後者はさらに預言者ムハンマドに連なる系譜を持つ人々（サイイド〔sayyid〕）と，世襲的に法学を学んでいる（出自的には部族民である）家系の人々（カーディー〔qā ḍī〕）とに分けられる。

さて，第5，6，7章では，本文は歴史に踏み込んで過去形で書かれる。第5章では，9世紀末のイマーム制の始まりから，ほぼ16世紀のオスマン朝の進出までを扱っている。ここで注目すべきは，第1にイマームは紛争調停とジハード(jihād)先導を主な事業としていたが，そのどちらも部族民の存在があって初めて可能であったということである。第2に，イマーム制が遺してきた編年的な歴史書に対し，10世紀の地理学者ハムダーニー(al-Hamdā nī)は部族について多くの書物を書いたが，日付や明確な系譜関係を記さない彼のスタイルは，部族の時間概念を反映しているということである。

次の第6章では，王朝（ダウラ〔dawla〕）と記された二王朝について述べている。カーシム朝とその次のハミード・アッディーン朝が，似たような歴史的過程を持つのは興味深い。すなわち，両朝とも，アラビア半島南部へ進出してきたオスマン朝に対し部族民を糾合してこれを撃退し，さらに下イエメンへも支配を広げ，上イエメンからの軍事力と（上イエメンよりも豊かな）下イエメンからの農産物税によって王朝を維持したということである。ハミード・アッディーン朝はさらに部族領土支配も強固にした。

第7章では，イマームへの抵抗運動から1962年9月の革命，それに引き続く内戦（～70年），民族誌的現在とほぼ同時期（83年）までを扱う。共和制の成立によって，大きな変化が起こる。第1に，イマーム制時代には，部族はどんなに勢力を持っても，政府に代表者を送るということはなかったが，革命後は，内戦中からすでにシャイフは共和制政府に参加している（一時期途切れたことはあるが現在に至るまで続いている）ということである。第2に，部族はイエメン・アラブ共和国という国境を持った国家の内部に位置づけられたということである。このことは，第10章で詳細に論じられる。

ここで民族誌的現在と歴史的記述との時差が解消し，議論は再び歴史から離れ，第8章では一気に村落に焦点が絞られる。ある村落の耕地の所有形態について詳細な数字が提示され，やや冗長ともいえるがアラビア語を駆使した詳細な農作業暦が説明される。農村にも貨幣経済が浸透し，非農業収入に頼る家族も多く，かつては蔑視していた商業活動につく部族民も増えている。ここで著者は，村落を中心とした生活であっても，より大きいアイデンティティーの影響が常に作用しているということを強調している。

第9章では，再び部族全体に視野を広げ，部族の安定性を，地理的，政治的に検証する。まず，ハムダーニーの著作に現われる部族の分布と現在のそれとを比較し，部族領土が地理の面で歴史的連続性を

有することを分析する。次に，部族システム内では対立均衡に則って帰属変更や同盟形成が行なわれるが，それは部族民自身の移動を伴わないだけでなく，部族民としてのアイデンティティーにも何ら影響を及ぼさないということを説明する。

最終章である第10章では，部族民が作ってきた内戦後の歴史を第7章と多少重なりながら辿り，部族と国家との関係について論じる。著者は，国民のアイデンティティーは1つの歴史の共有によるものであるということを強調する。著者によれば，しかしこの考え方自体，多元主義的な部族とは無縁である。また，イエメン人の中で進化主義的な発想をする人が，部族を過去の遺物と見なしている。さらに現在の国家関係も進歩と発展という1つの軌道上でランクづけされるという状況で，部族は後進性のレッテルを貼られる。状況が変わっても，歴史を記す側が部族を無視することは，変わらないのである。

III

本書を読めば明らかなことであるが，著者の学問的関心の広さと，資料分析の並々ならぬ努力には驚かされる。本書はまず，イエメンを研究しようとする学徒に多くの示唆を与える。何よりも本書は部族を時間的空間的に包括的に扱っており，その理論の精密さは優れたものである。紙幅の都合で紹介することを省略した興味深いテーマも多く，専門分野以外のテーマにも視野が広がる契機となろう。また，シャイフの機能や部族構造の分節化の議論は，従来の人類学の議論を前進させるものであり(注2)，本書がイエメンに限定された議論に止まっていないことを示している。そして，南北イエメン統合（1990年5月），内戦（94年5～7月）を経た現在の視点からはやや物足りない気もするが，本書は歴史を正面から扱っており，その点でも注目に値する。

最後に，本書を通して議論されてきたことに対し若干の指摘をしたい。第1に，著者の歴史への関心の高さには，人類学の潮流とイエメンという地域性との2つの理由があげられるということである。まず，著者も述べているように(xvi ページ)，近年人類学が歴史に注目しているということである。それにはいくつかの理由があげられるが，その1つに民族誌を現在形で書いてしまうことがある。人類学者が共時性を強調するあまり，人類学者が調査の対象としている人々の持つ歴史や時間概念が無視されてきた(注3)。しかし，「彼ら」に歴史はなかったのか。

周知のとおりイエメンは無文字社会ではなく，書かれた歴史というものも数多く存在している。しかしアラビア語を書くという作業は，歴史的に見れば一部の知識者に限られたことであり，歴史を作った人と記した人とは完全には重ならないだけではなく，後者が前者に好意的な感情を持っていたとも限らない。歴史の残余を部族的と呼ぶことは，何も近代国家成立以降のことではないのである。

歴史の原動力としての部族民を強調するという著者の試みは確かに成功しているが，著者は2つの矛盾を抱えている。まず，歴史の原動力である部族民自身はほとんど書かれた歴史を遺さず，史料として著者が依拠したのはほとんどがイマーム側の歴史書であるという矛盾である。それは，特に共和制以降の記述（第7，10章）が非常に複雑な構成となっているのに対し，それ以前はある意味で非常に事実を追いやすい記述になっていることに端的に表われている。次に，部族民の時間概念はハムダーニーの著作に似ており，民族誌的であるといえるが，それにもかかわらず，部族の歴史を編年体で書かざるを得ない矛盾である。年代を追って書いてしまうことは，彼らの時間概念を無視してしまうことになる。部族の歴史を考えるとき，以上の矛盾は大きな課題となろう。

第2は部族という言葉をめぐるものである。本書のキイワードともいえるこの言葉は，非常に難しい言葉である。部族という言葉が「未開」「野蛮」「後進」を含意してしまうのは避け難い。にもかかわらず著者はあえて部族という言葉を使用しているが，部族とは何か答えていない。著者は，部族を所与のものと考えているようである。この曖昧さの中に，著者の部族の考え方に対していくつか疑問点が生じる。まず，著者は，部族が現在でも非常に政治的に勢力を持つハーシド (Ḥāshid)，バキール (Bakīl) の

二大部族連合に属する部族のみであるかのような表現をしていることである。本書を注意して読むと，上イエメンには両部族連合に属さない部族や他の部族連合もいくつかあることに気がつく。数からいえば少数であるが，それらはどう位置づけられるのか，はっきりしない。また，歴史上ハーシド，バキール以外の部族連合も興亡していたが，このことは，著者の主張する部族の安定性に反するのではないか。言い替えると，著者は，両部族連合だけに注目した結果，部族の安定性を導き出したのではないか。次に，著者が保留した部族の定義に関わることであるが，著者がイエメン南西部を非部族的という（7ページ）根拠が曖昧であるということである。歴史的に見て，南西部に部族が全く存在しなかったわけではない。現在は部族的な結合が弱いという予測はつくが，それは程度の問題である。南西部は「非部族的」であり，さらに北東部の部族領土にも「非部族民」が住む，という曖昧な表現は，今後検討すべきことであるが，それはまたイエメンにおいて部族とは何か，あらためて考える必要があるということも示唆している。

（注1）　その理由として，旧北イエメンでは，今世紀半ばまで鎖国政策がとられたこと，1962年の革命後は内戦が続き本格的な調査が始まったのは70年代に入ってからであること，そしてたとえ政府の許可が下りたとしても，部族の自立性，閉鎖性のために部族領土での調査が困難であったこと，などがあげられる。

（注2）　Dale F. Eickelman, *The Middle East: An Anthropological Approach,* 2nd ed. (Englewood Cliffs: Prentice-Hall, 1989) 参照。ただし初版（1981年）にはイエメンに関する記述は皆無である。

（注3）　たとえば，George E. Marcus and Michael M. J. Fischer eds., *Anthropology as Cultural Critique: An Experimental Moment in the Human Sciences* (Chicago: University of Chicago Press, 1986) など参照。

（東京大学大学院総合文化研究科博士課程）